

---

# ロリコンとはかくあるもの

エネゴリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロリコンとはかくあるもの

### 【Zマーク】

Z8830Z

### 【作者名】

ヒネマツ

### 【あらすじ】

事あるじとに無駄に深く考えて自分の世界に没入してしまつ悪癖のある「俺」。

普段の生活のなかで、我々は意識する事は無いだろうが、電車の中というものは、いわゆる日常の対概念である非日常の場として存在している。非日常とは、日常から隔絶した異質で異様な世界のことである。こと電車における非日常性は、その物理的な要因による空間の閉鎖性と、公的な交通機関という特質による人間の凝集性および差異性によつてもたらされる。

電車が一度走り出すと、たちまち密室が成り立つことは簡単に理解できるだろう。停車しない限り走り続けるため、扉は安全のために閉ざされるようになつてゐる。この電車の密室を利用した殺人事件は、現実に起きているかどうかは別にせよ、推理小説ではお馴染みのものだ。

その逃げ場のない閉鎖的空间に、名も知らぬ人間が、老若男女を問わず集在している。これは、電車が交通機関として機能しているからに他ならない。彼らは、ただ同じ方向に進むという理由のみによつて同席しているのだ。そこには、他に何らの共通性を見出すことはできない。

以上に指摘した要因から、ひとつつの結論を導き出すことができる。それは

「お前さつきから何ブツブツ言つてんだよ」

俺の隣に座つてゐる男、木村が言つ。

「いや、電車つていろんな人がいるよなつて思つてさ」

俺の回答に、肯定も否定も窺えないような微妙な顎きを返す木村。自分の考察に自信を持つてゐる俺は木村に問い合わせす。

「納得できない？」

「まあね。だつてそれはどこでだつて言えることじやん。街中だつていろんな人がいるよ。同じ人なんて一人として居りやしない」

「ああ、舌足らずだつた。たしかに電車以外でもいろんな人がいるよ。それこそ君の言つとおり同一の人間なんか存在しえない。でもね、電車というのは、そこに逃げ場がないことと、凝集の度合いが高いことが他の空間とは一線を画していると思うよ。電車をあいて他にはいはずだ」

さらなる反論に身がまえた俺だが、木村は追及するのが面倒くさくなつたのか、無言で携帯電話を弄りだした。喧嘩するつもりはなかつたのだが、気まずい雰囲気になつてしまつた。

• 10 •

沈黙をかき消すように電車のガタゴトという音が大きくなり始める。そんななか、一組の男達の会話がやけに耳についた。

一ノ五、口々齋

人は見かけによらないものだ。彼らは今時の若者といった出で立ちは、率直に言つて異性にもてそうだ。周囲に聞こえないようひそひそ声で喋つているようだが、しかし、そうした囁きというものはかえつて音が高くなるために、目立つのである。そもそも話の内容からして周囲から浮いているのは間違いない。意識せずとも俺は彼らの話を聞くことになる。それは木村も同じで、携帯を弄る手が止まつていた。

「幼女最高～うひや」  
「つるぺたつるぺた～うひや」  
「つるぺた～幼女幼女幼女～」  
「つ、る、ぺた～幼女」  
「ひやひやひや」 「うひせまほひ～にロコロコ～

どうやら彼らは「幼女」「口リ」「つるぺた」という単語のみで意志疎通を行える新人類らしい。終始そんな調子のまま、やがて二人

は目的地に着いたらしく降車していった。そのときである。沈黙を守っていた木村が突然、口を開いた。

「たしかに、いろんな人がいるな。お前の言つこと、よくわかつた」  
理由がどうであれ、緊張した空気が戻つて何よりだ。  
「だろ。しかしあれだな。最近はロリコンが多いね」  
「そうだな」

つるべたというのは胸部の隆起が確認されない状態、つまり乳房の未発育段階のことを探しているものと考えられる。換言すれば、男女の性差が生じていない時期ということだ。したがつて彼らの口にする幼女という概念は、第二次性徴期前の女性を指すものと考えられる。年齢にしておよそ、7～11歳だ。

近年、以上に示したような幼女を性愛の対象とする若者が増えている。いや、正確には自称している若者である。彼らが本当に幼女を愛しているのかどうかは定かではないが、近年はその数が尋常ではない。俺はそのことに猜疑を抱かずにはいられない。なぜなら前述の定義に該当する時期は小学校低学年である。低学年の児童に性欲を抱くのは明らかに倒錯した性状と言つて差し支えない。表現を緩やかにする必要もない程の異常者だ。

一般的な理性と常識を持ち合わせていれば、そのような異常な性癖を、小声にせよ公然と口にすることは人として間違つていると判るはずである。ロリコンは指弾されるべき存在でしかない。にもかかわらず、最近はやれ「幼女」だ「ロリコン」だ「つるべた」と言つたことを平氣で話題に上らせる手合いのなんど多いことか。これは、彼らが生来のロリコンではないことを如実に表わしている現象といえよう。彼らの言つ「幼女」は實際上の生身の人間をを指しているのではなく、もっと概念的で記号的な

「またか。今度は何考えてたんだよ」

また自分の世界に入り込んでしまつた。俺の悪い癖である。

「ああ、‘じめん’‘めん。ええと、それが口つやうら幼女やうつるべ  
たやら言つてた人達がいたよね？」

「いたね」

神妙な面持ちで頷き返す木村。そのまま至つて真剣な眼差しで俺は  
話を続ける。

「彼らは本当に幼女が好きなのかなと思つて」「  
「どうだろうね。つるぺたつて言つたら、本当にちひりちゃい子つて  
ことになるけど、そんなひといいるのかなとは思つ」「  
「だよな。俺ら以外には見たことないし」

「うん。会つたことないよね」

「ふ」

「はははははは」「はははははは」  
抑えていた笑いが同時に弾けたとき、ちょうど乗車中の電車が目的  
の駅へと到着した。

「あ、ついた」

「行くかあ」

「お前今日の担当誰?」

「小2の有紀ちゃん」

「いいなあ」

「へへ」

「俺今田男児だし。まあ明日は朱里ちゃんだけど。へへ」  
俺と木村は、勤務先のある英語塾へと歩き始めた。

電車の中といつ場所には、実に様々な人間がいるものである。

(後書き)

どうでもいいことですが僕は電車が嫌いです wとくに満員電車はぎゅうぎゅうでいやんなっちゃいます(ここ) = まはあ  
なので電車を舞台にしたホラー書いつと黙つてこうなりました! 純粹なホラーとは違いますが、このつのも恐ろしいかな~~と思いませんか!?

直接的な描写はないですが一応R15でっすん。

エロいの期待した方ぜひばせん

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8830z/>

---

ロリコンとはかくあるもの

2011年12月27日21時48分発行